

異人恐怖傳  
前編  
上

洋学文庫  
文庫8  
C 211  
1





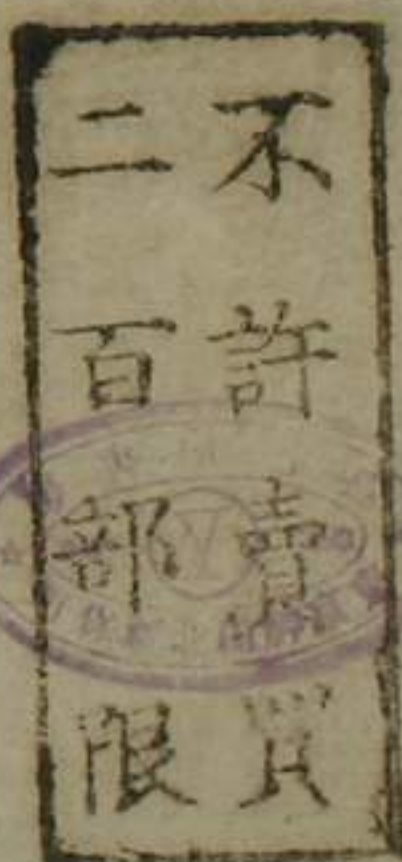
異人恐怖傳譯例

一 是書ハ西域の人(エンゲルベルトケンブル)が往年我國小渡りて見聞を一所を集めく著し日本志の中少く金骨ともいふを記所あるを今將に摘出して拙き筆をりて翻譯しるものなり日本志ハ彼方の語をく(ベシケレイロギハンヤツパン)といへる書あり

一 書中所々(檢夫尔)が自注あり彼方ゆくハ短文ある注ハ書の間(Shogun)かの如く前後に半月の形をなして其中間小記せり此方ゆく二行に書するが如し今ハ予が注と混雜せんこと必恐るが故に其首ごとよ(檢夫尔)自注曰の六字を

○恐怖傳上

○例一



加ふるものなり  
 一 書中五言對句のぶらりものなり是ハ詩文の類あれども  
 彼方小五言七言あどの事あるはあは只其言の教た  
 まるま相似るるを以て助語の類少く一二を添減して照應  
 をなすしむるはなかり惣て彼方までと詩小を韻脚あれ  
 ども今是書に出るハ詞の類なるゆゑ韻脚ハ見えぬ  
 一 彼方の文字ハ音のまじりて義あり我等が國字のぶらり  
 故に我國の人地名など皆其音をめて記して今是書中地  
 名人名の類を記しとふ或ハ本字をめてし或ハ國字を以  
 する故は蘭字の音ゆく(キヨモリ)(ヨシツ子)(サツマ)(ヒゼン)を

どもら分明は是清盛義經薩摩肥前を直に本字を  
 以て記せり讀不便なるむが為あり又日本二字の義を訓  
 してニツポンを日の基本といはんが如しと記するがごとくハ  
 り日本ハ日ハ基本といはんが如しと記するハ日本ハ  
 二字重複するが故に國字を以てニツポンと記せるもの也  
 但し日の基本ハ原文は(ゴロントスラクパンデソ)とあり又  
 酒を(サケ)とりあつと記するも其酒を酒といふとは翻し難し  
 酒ハ原文ハ(ヒール)といふさまはとて其(ヒール)を酒と云  
 と翻すハ(ヒール)の語は對譯あり故に國字を用ひ  
 て(サケ)といふと記せり又地名ハ(ボンゴ)とありて豊後とを

備後とも分明ありぬ類あり是等も原文のまゝに國字よ  
 く記せり又右といへる〔サケ〕と實ハ〔サツキ〕と記せり是又原  
 文の訛よ仍しり  
 常の文は平假名を用ひ蘭語蘭音ハ片假名を用ひ前後  
 と紛亂せざらんが為なり  
 是書元來ハ鎖國論といへる題號もあく又上下卷の別もあ  
 是等ハおのまが假小設けしものなり  
 是書を讀んよはまら世界の四洲五帶といふこと淺知べし  
 四洲ハ皇國支那唐を印度 韃靼伯尔奈亞等ハ亞細亞  
 洲の中なり魯奈亞今云の本國都兒格の都城熱尔馬泥亞國

和蘭國波爾杜瓦爾國等ハ歐邏巴洲の中なり歐邏巴ハ亞  
 細亞の西北よりあり歐邏巴の南より亞夫利加洲なり此地よ  
 莫羅格國葛納木太波亞國等より歐邏巴より西より當りて  
 亞墨利加洲あり此地多くは歐邏巴人の為し押領せしれ  
 たり亞墨利加を我國よりいんを却て東より地球渾圓  
 なる故あり又五帶ハ天は赤道の下を地の赤道とて天は  
 南北極の下を地は南北極とて赤道より二極に至るまで各  
 九十度とて赤道を距るるや南北各二十三度半の間を何  
 ても寒帯といひ寒暖の中間あり故南北何れも正帯と云  
 一暖二寒二正ともよ五帶あり我國ハ北緯  
 赤道より 大概薩  
 北は幾と

摩の海邊まのうみべゆて三十度津さんじゅうどつ輕かろゆく四十度しじゅうどなりこ北きたの正帶せいだう中ちゆう  
なる地ちなり

作噩之歲雁來月既生魄



異人恐怖傳卷上

極西 檢夫爾 著



今いまの日本にっぽん人じん全國ぜんこくを鎮しづめし國民こくみんをく國くに中國ちゆうごく外がい小限せうげんらば  
敢あて異域いおきの人ひとと通商つうしやうせざしむる事實じじつ小所益せうしよえきありし  
典あづまりや否いなやの論ろん

我等われらが住すむ地球ちゆうきゆうハかくむらり狭小せうせうなる世界せうかいありりのを今いま又また  
それが中ちゆうに於おて更さら小別せうべつをなし分ぶんをあり事を好このまむ  
好このまむと議者ぎしや多くハ無道むどうなりとせん同好どうこう通交つうかうの道みちハ人間あんかん此  
宜よろくありべき所ところありを今いま若わかこれを破やぶる事こと好このまむを其罪そのつみの  
大おほなること人殺ひところむにむしとせん凡造物者おほつくりものの生なむる慶しんがうの

○恐怖傳上

〇一

物熟々同類聚會通交さるるやを欲さざるされを此義に背  
まじく議論を立んものハ実小造物者を蔑視さるものなり舉世  
唯一ツの日輪を見唯一ツの地面を踏て又共小同一気呼吸  
せり天地の我れも不設る處の節度造物此我れと與ふる處の法  
則一ツと通交偕生の道小関係を信とりあむなり人生ま  
て鵠燕小びとまじらざるんや言人としてかの鵠燕の類此豈彼天心  
の妙用自在を分付せしめて我體中と在て至尊さる所の神魂  
をわく形體或一和をさざる處ありとうせん言ハ神魂全く格別  
得るの理もありあめとあり今其形體を〜恒小一國の中に囚困  
せしめ〜とまじりと神魂とを〜何と殊邦異域の奇觀娛樂と

與ら〜ある事を悪まぞ可あらん彼衆星も無邊の天際と在  
〜これが為は大小競ふがごとくあり言は諸星又能く周遊して其  
所を〜も守學者多くハ信ど〜諸星の體尊〜して勝まつり  
無物無毛の境あるを〜次然らば是亦各々一世界ありて種々  
の有情ある衆生はよく天恩を信仰するの道をも知さる者有  
て住所とまらな〜然らば地球世界は未生以前より是等の  
衆生ハ既ハ宇宙小充滿さるものなり〜ヨブ〜古人の名ありて  
又直ハ其書名の第八  
小人〜も又此理をいへる〜有るされば何事の人も巷  
學陋習の小益を脱出〜敢て尊大雄偉高上の見を立んと  
おも〜直ハ造物の慈悲智慧ハ無窮あることを信じて以

決定して憚る所あるはと勿き星體の天上よりハ譬へバ諸大域  
の地上に在るが如く然して天際涼游に大氣高遠ありて中間に  
滿るるは其世界彼此互に通行するると能はば既小如此の不  
通は世界あるは以て觀まは其諸世界に住らむ衆生も彼此各々  
異種異性殊状殊品ありて是皆守定し難うざるの道理  
なり是論最信を取不堪るの事なり特小直実の道理  
を以て此を反覆して彼小達して觀るに今かの  
獨尊至智の造物者の同性同根ある物をもて造り出せる衆生  
も若くハ彼球若くハ此球の世界に共なりて同く住らん  
ものハ譬へむ一域の肉に同居せる民は如し亦くは宜く相

親睦して失ふことなかるべく乃至其道小戻り其事を破らん  
もの何れハ最上の罪科なりと其理亦自ら明白あり諸又  
別して我地球をいたる造物を設けし人民の住所と智  
慧と慈悲とをわく亦能ふとさうに造営し其人民をして  
悉皆相通して一體となさるべうしむ國土の異は隨ひてその  
産する所種々の草木あり種々の禽獸あり種々の金石あり天  
下最上觀樂は地としむ悉皆萬殊其前小備へく具足すること  
ハあれりの小ぞ有りける

此有饒禾稼彼有美蒲葡萄印度出象牙沙巴產名香沙巴  
地各  
人倫互に扶助す所の功用は力の是ぞ通交同好の要

樞あるのなり々自然らバ今の日本人の目前小これ天經を  
破廢一頭露小かの天心を輕侮一妄小天此期する所の同好此法  
則人間一日もあつてあつて物を残る如たハ争で  
理小適へる争で罪中らバとせん既小其國中を禁錮  
外國諸方の人と通路をせしむ惡くて乃至入来せんと欲する者  
あれバ強て拒て遠ざけ土人を境内小籠て恰も獄囚の如くし  
暴風諸災の為異國の浦に漂流しむ者たまへ異邦を  
見しとては聞とたハ生涯これに囚圍小囚あつて連逃の者ハ  
捕へ歸するがごとく自ら好くて出國を去る者あまバ若く  
ハ國を不足ありとて出らんもまたハ海外の所を觀んと欲

して出らんを一切小ことを磔刑小處一異國の人不幸小  
暴風破船の災小よつてかの浦に漂着する者あれバ亦捕へて獄  
小投する此類のごとくハ豈う此造物の制度上天此法則の天  
下は樹立せるもの破越するに非ざりて何ぞや

右ハ鎖國甚其理あま似るあつてをいへり諸星各一  
世界なりとする事ハ元来厄日多國の人ハ始めて發明  
せし所の後世天学家多ハ此流小歸依するハ先  
大陽と恒星とを一種として同く不動なりと地球と  
五星と依伍として共ハ大陽の外を繞るとして五星の  
類皆各々一世界なりとするものなり委曲の事ハ天學



書小見えて予が譯せしもあまきと今ハ畧しつまつ右の  
中間見えし四句の文を元文小羅旬語をりて記し  
前の二句ハ古の詩人(ヒルギリユス)が語小本はかりと見  
えし今(スラールト)名が羅旬書小より終小大意を翻  
譯し得し如くなれも原文作意巧拙の事より  
予が輩の得し親ふ慶ふありと沙巴ハ福亞臘比亞國の  
中小りや

右の段天下を一體同好とあさんと欲するの論ハ彼方殆諸  
家普通の言なり(檢夫尔)次の段をいせんが為先廣くこれ  
を挙し次の段ハ乃ち(檢夫尔)が獨到の論あるべし自向

自答のおと

今我是淺論小述むと欲する所のかれ日本人の當今此國法  
小より饒益する所あるが故に必然をざるごと能する所の  
實理小おいく既小後学此智士の異見しることを聞及びつこ  
バ恐らく諸家各自の辨説誹謗おは数多あるべしめしとてハ  
皆其人々の意小任を然りとていへどと願くハ暫く談説を以て  
強く我を喻せしや以止し試し我放言せんことを許してよ  
我固より理義の可ある處悦ぶべし處数多あるにより心  
を傾けて信じしハ今我地球の面小在て住する小然異語  
異習異趣の諸俗を以し事造化の聖智妙用小於て違ふる

あることなり。たゞ一面の地ありて唯一種の民を容へた  
のこゝろにして種々許多の俗を受ふ可し。然るときハ我等必其  
域内小於く河あり海あり連山此周繞するはりて分地の界  
をなせるを以て又各所各別ある奇特なりてかの造物者こ  
こを以て各俗を以て各方小居住して自守自保をなすべし  
むるもれは強ひて且天既ニ羅百爾言語紊亂恐るべし。の時小  
ありて彼後前いまづ同軌一體なりし人民を以て密交同好  
を破りて從來離散して各黨を以て各所を住處とするに至  
らむ。むるものは豈其所好所期の然らむ。こゝろは確  
乎々々明瞭を示さる。小あつてや此事後注也其後小いりて人民の

根性一化しては故小彼等各方小於て漸く一體となりて  
一箇の王國をなす。或ハ同好合一の國をなす。小及てハ自然ニ  
同語ありての相親して隣國の異語はあはれむ。これを惡み又ハ其  
采を妬めり王國ハ王の國あり。一箇の長を立て事するを以て長。解有の地ハ小ハあつて。此故  
小今かの人主の兼併を嗜むるの天然に封界を越え。猶も其所  
領を廣大よせんとす。れを其地よわいて此方の艱難を平げ。彼  
方の騷動を治る。小違はる。の間小して内亂外寇後小起。アて  
却て本國ハ水旱の地面を失ふ。こゝ毎々を以て又同好合一の國  
の強士あり。むは其長上ニ事あり。諸俗烏合の力を以てす。  
小はゆゑに麾下の諸國政法格別にして平生互小猜忌の心

を懐けり是を以て過て強大あるものは没落し及ぶこと却て速うなり造化り各地小恵む一切有用の具をめぐりて住民全く境域の内は満足して露むりも他人固有の地を犯す心を生むれば道理あるべからず如くならば史冊も然痛まれば値遇まらば衰へて落去などの事此も充滿する事ハあらず然らば相殺害し相搶掠し全國を轉して荒原となし無人の境となし高名ある宮殿寺觀破て灰燼と成り堆塊と成り類其外許多の怖れ大變怖れ兵亂さてハ慘刺不仁の事併吞侵奪の業此ごとく人間一切聞知る事なからざるべき事さすバ又心安く其地を營む勤め

て凶荒の地を開き好く諸藝を盛め進て善道を修り悦んで端正を事し情欲浅小私事を貪らば善を賞し惡を罰するに廉直を以し子を育み小謹慎を以し家族を御する小精審を以し惣じて自とあく他となく共小その福を得て諸族何事も國家に治綱を守護するに足ぬべし爰に最慶賀を述べたハ日本人の一流めてぞ有る其國檻の内不在太平の澤を受て異國の人と通商通交せざるをわく患とせば如何とあまバ其地勢有福あり長き事なると堪るがゆゑなりされバ又我輩の異國と通商通交する事を好むハ偏り人生切用の物を取来らんが為なりハ彼切用の物をして

好ありし免佳なりしめ便なりしむること致さるのを来  
具ありしがあめし兼てハ又花奢の風を止めんが為あれバ  
譏るべきよハあべ  
取来して具ありハ買あり花奢を止めんが為あれバ  
止るハ天過あるをわしと賣たり 刑法ハ格く國体  
を理治せんが為なり 我國の治法支那に習ふるを  
所ありて類をいなり 教法ハ我心意を  
安全堅固和樂ありしめむが為なり 我國の佛法印度よ  
来まりては類あり 學術ハこが  
諸根をくく怜利なりしめむが為なり 器械ハ達用のこめ又ハ  
美好の為なり種々の諸物ハ我衣となし 我食となさんが為  
あり 醫藥ハ我壯健を保ち又ハ壯健ハ復せしめむが為なり  
是等皆我輩の異人小求る處ありのなり然らバ今爰小一  
箇の國あり造化これよ處するハ寛良の徳を以て一切性命

を扶け保つるの諸用を具へ施して是れも其人の勤勞小より  
て國勢強大し世界に著顯するよいと係が如たハ若し  
其地勢の宜しむ随ひて國體を際界の内ハ涯持するハ是  
甚かたハ非むし且又國人の勢力勇氣外國入寇の變ハあ  
りて能其國のこえに防護するよ是れぬべくはは堪  
てありて限ハ異國の産物器械を用ぎて是れより兼て  
かまらざる不良輕忽矜奢の風及び詐偽戦争奸謀の害を免ま  
んこと唯小議の當然しむけくハもありて又大ハ其國の利益  
しむる事必定なり斯る國いづこよりあると尋るハ今小至  
して世小しれし日本もてぞありたる故ハ今我左の小記

を以て其事を述べて日本と他國との差別を明白せんと欲し  
〔罷百尔〕と〔巴毗鸞〕國の〔罷百尔〕と名高き高臺あり今  
ハ破壊し山のごく見ゆといへ太古〔ノアケ〕といふ  
人の時天下大洪水あり萬民悉く没溺して唯小〔ノアケ〕  
が一黨のみ其災を免きて〔巴毗鸞〕の邊小國をなす漸小  
蕃茂しつらつら其後大洪水より百年をくりありて奇  
觀の爲小や有らん高臺を築きつら小天其長傲を憎み  
て民をしく徒黨を別て各々自然小害論を殊おし相合  
く一体となすと能くしむ其上力役は倦て終は各々  
其黨を引て四方小分散すとといへり右大洪水ハ年麻を考

るりいとある帝堯の時洪水横流き即是なり〔ノアケ〕  
と曆算全書小上古大師諾厄とある是なるべし〔アルケ〕と  
いひく大なる様のごとくたつり此を作すく是小乗て  
洪水を免きつらといなり右の〔ノアケ〕が子〔セム〕と〔亜細亞〕  
の祖とあり〔ヤヘット〕と〔歐邏巴〕の祖とあり〔カム〕と〔亞夫利加〕  
此祖となり〔亞墨利加〕も亦〔カム〕が後ありといなり惣て〔歐〕  
邏巴も今今の満世界ハ皆〔諾厄〕が後なりと思へり〔巴毗〕  
鸞國今ハ〔ジヨロシヤ〕國といへり〔伯尔奈亞〕國の傍小  
や其邊小〔アララット〕といなり大高山あり山上天氣常  
は晴和なり〔諾厄〕が乗し〔アルケ〕今猶く安置まといなり

惣く右の一段ハ鎖國甚その理あるをいへり通商  
の事今猶我長崎小移りて唐和蘭陀の交易ありハ皇國  
といへども絶て外國通商あるハ何れに比しあらず  
ハ歐邏巴の眼より見まハ通商といふを足むたざり  
唐和蘭陀はこゝハ篇末に詳あり

(ヤツレン)その人々(ニッポン)といなり日の基本と言んら如く即かの  
歐邏巴小おいく其國の事を記き諸家の最初なる名譽の遊  
行者(勿溺奈亞)國の(マルキユスホーリユス)ガ(ジツパンキリ)といへる島是  
なり(マルキユスホーリユス)實ハ衆嶋の惣体を稱して日本といひ許  
の灣あり峽あり又遠く地中小入来まる海ありて彼此の地を

隔て別ありし其形や王國(大玻里太泥亞)と(喜百利尼亞)  
とよ似て(大玻里太泥亞)ハ(暗厄里亞)國と(思可存亞)國との物名あり以東方隔  
絶の境小あり造化すは是小惠むよ勝て暴猛危険の海を以  
して殆行て到るべくは攻て克べくさる地とてことを得  
きむ是故小南方諸國より渡来する海船周歲の中多くハこれ  
暴浪逆風を犯すの時少く我徒の船行に用あつべの日ハ僅小  
少許の間なるのみ巖石多き海岸小接する小曲隈浅水充滿せる  
海を以して大船を置小所なり唯一箇の佳港ありて稍著大なる  
船をも容ふ宜しこれ長崎港といふ然まても其口極免て  
窄小しく様々遷廻せり鍛煉の舵師其海の浅水山礁沙

○

○十

堆たいなごどよく暗記あんきしむ者ものありてもまゝ通行つうこうの危難きなんな  
る所ところあり此こより外ほかへ更さらよれば港みなとはるを知らず假令たとひこれあり  
むよハ其人そのひと好生こうせいの心を推おしして我多われたに告つることなるべしやハ  
凡我徒わがたの大洋おほいを渡わたるの災害さいがい危難きなん別わかて臺灣琉球たいわんりゅうきゅうの邊へんに在ありて甚おほ  
し類るい逐一いちいちに違ちがひ古時ことき波尔杜瓦人ポルトガル 寛永かんえいの比国ひこく禁こん  
蛮人ばんじん是こゝ 日本にっぽんへ通交つうこうせし頃ころ渡海わたうみの術わざいまだ補虧ほきをさりし時ときハ  
いひなごり三艘さんそうの船ふねを出いして其中そのうちの一艘いっそう恙やまなく到着とうちやくせしを  
以もて猶なほも有あり幸さいに奉まよとさしとりさしバ渡海わたうみと危難きなんと常つね小  
相伴あひまひく離あるまざるこゝや知しぬる

歐羅巴洲エウロパ勿な子こ祭さい亞國あの(マルキエスポーリエ)といひし者もの

後宇多院ごうど建治元年けんぢげん生年なまう十八じゅうはちの國くにをわく鞆而た鞆た而た鞆た  
國くに小行こぎやうて(キエフライ)といひし王わう小事せうじへ其王そのわうの支那しなを併あは  
の時とき小値こぢく隨したがて支那しな小行こぎやうく前後ぜんご十七年じゅうしちねんは間ま稍重しやうじゆうく用もち  
みられく其後そのち印度いんとを經へて再またび歸國きこくをりといひし(キエフライ)  
もえの世祖せいその名な忽こつ必烈ひつれつと史し小見せうけんえたる是こゝなる危あし此こゝ  
(マルキエスポーリエ)が活計かつけいより歐羅巴エウロパ人じん初はく皇國きうこくを知しり  
といへり(ジツパンギリ)ハ其訛誤そのあやまちの言ことばなり

其地そのちの衆庶しゆうじゆありこと言語げんごも及およぶ所ところあり然しか不大ふたの域あまし  
斯しかる莫大もくたいの人数じんすうを究きうるこゝは殆理外たいていげがいなること想おもへる人もありん  
其諸大路そのしよたうは如ごときハ村落そんらく城郭じやうかく連続れんぞくして殆たいてい一列いちれつなるがこゝはく絶た

バウリかの一郷を<sup>出</sup>まきバ即<sup>ま</sup>さる<sup>は</sup>一郷小入<sup>る</sup>行<sup>く</sup>数里を<sup>徑</sup>  
ましても唯<sup>一</sup>條の街市小<sup>ら</sup>る<sup>が</sup>ごとく<sup>み</sup>て<sup>実</sup>ハ衆村の合成<sup>を</sup>  
ま<sup>る</sup>る<sup>が</sup>知<sup>ら</sup>ぬ<sup>は</sup>是唯上古別村<sup>なり</sup>を以<sup>て</sup>今ハ合一<sup>と</sup>れ  
ども<sup>も</sup>舊<sup>小</sup>仍<sup>く</sup>其名<sup>は</sup>異<sup>小</sup>ま<sup>る</sup>のみ又其地城邑多<sup>し</sup>其尤大<sup>き</sup>  
あ<sup>る</sup>ハ廣大壯麗<sup>及</sup>び衆庶<sup>あ</sup>る<sup>こと</sup>天下<sup>諸</sup>城の最大<sup>あ</sup>る<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>は</sup>  
列<sup>小</sup>ら<sup>り</sup>其<sup>一</sup>を(キヨ)又ハ(ミヤコ)とい<sup>つ</sup>り尊称<sup>なり</sup>都城<sup>よ</sup>こ<sup>ま</sup>  
首都<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>が如<sup>し</sup>(ケイステイケ)エルフケイツル<sup>天皇をい</sup>つ<sup>り</sup>其<sup>義</sup>ハ後<sup>小</sup>  
者<sup>の</sup>意<sup>の</sup>御座<sup>なり</sup>縦<sup>三</sup>辰路<sup>一</sup>辰<sup>ハ</sup>我<sup>半</sup>む<sup>ら</sup>り横<sup>二</sup>辰路<sup>む</sup>ら<sup>り</sup>城<sup>小</sup>  
下<sup>の</sup>体<sup>甚</sup>有<sup>整</sup>お<sup>り</sup>諸街<sup>相</sup>接<sup>る</sup>處<sup>其</sup>角<sup>最</sup>方正<sup>あり</sup>第<sup>北</sup>七<sup>回</sup>  
を見<sup>よ</sup><sup>檢</sup>夫<sup>尔</sup>全<sup>書</sup>中<sup>小</sup>許<sup>多</sup>の<sup>圖</sup>又<sup>江</sup>戸<sup>と</sup>い<sup>へ</sup>る<sup>あり</sup>實<sup>ハ</sup>全<sup>國</sup>の<sup>首</sup>  
あり京江戸の國その中より

都<sup>より</sup>(ウエーレルト)レイキケイツル<sup>將軍家をい</sup>つ<sup>り</sup>の<sup>御</sup>座<sup>なり</sup>我<sup>敢</sup>て  
ま<sup>る</sup>る<sup>を</sup>天下<sup>小</sup>知<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>隱<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>大<sup>城</sup>の<sup>都</sup>よりとい<sup>へ</sup>る<sup>第</sup>三<sup>十</sup>  
の<sup>圖</sup>を<sup>見</sup>よ<sup>此</sup>事<sup>我</sup>既<sup>に</sup>身<sup>づ</sup>ら<sup>り</sup>知<sup>る</sup>又<sup>あり</sup>城<sup>下</sup>の<sup>口</sup>あ<sup>る</sup>品<sup>川</sup>  
川<sup>より</sup>駕<sup>し</sup>疾<sup>あ</sup>る<sup>徐</sup>あ<sup>る</sup>び<sup>て</sup>大<sup>道</sup>を<sup>通</sup>過<sup>し</sup>て<sup>小</sup>  
其<sup>道</sup>實<sup>ハ</sup>微<sup>く</sup>屈<sup>曲</sup>なり<sup>と</sup>ハい<sup>ひ</sup>あ<sup>が</sup>る<sup>終</sup>日<sup>わ</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>二</sup>方<sup>の</sup>  
界<sup>小</sup>届<sup>く</sup>こと<sup>を</sup>得<sup>む</sup>

(ゲーストレイケン)ハ佛家<sup>より</sup>出世<sup>と</sup>い<sup>へ</sup>る<sup>が</sup>ごと<sup>く</sup>(エルフ)ハ  
世<sup>々</sup>の<sup>義</sup>あり(ケイツル)ハ帝<sup>號</sup>なり(ウエーレルト)レイキ<sup>ハ</sup>佛家<sup>より</sup>  
少<sup>く</sup>世<sup>間</sup>と<sup>い</sup>へ<sup>る</sup>が如<sup>し</sup>出世<sup>帝</sup>世<sup>間</sup>帝<sup>の</sup>義<sup>あり</sup>漢<sup>文</sup>よ  
てい<sup>て</sup>禮<sup>樂</sup>帝<sup>刑</sup>政<sup>帝</sup>な<sup>ど</sup>い<sup>へ</sup>る<sup>が</sup>ごと<sup>く</sup>(檢<sup>夫</sup>尔)ハ(蘓<sup>ス</sup>



亦奈亞(ルシヤ)國の使者小つた(魯奈亞)國を経て(伯爾齊亞)國  
より行き遂小(咬啗吧)小渡(夫)より元禄三年(湯醫)とあり  
て(暹羅)國を経て我國小渡来し其翌年(泰府)ぬ元来ハ  
醫師なり

天下の大城廣都の江戸よりも大あるも此ハ(亞夫利加)  
都(ル)格(地)厄(日)多國の(諛禄城)北(亞墨利加)の(墨曼哥城)  
など(あ)れ(れ)と(諛禄城)大(さ)外(郭)より(中央)ま(ど)一(日)半(路)  
此城十一重の門ありて中なるは(錢)を(り)て(造)まり(市)ハ  
生(し)る(獅子)お(よ)び(龍)など(賣)る(所)あり(二)ク(キ)ル(ベ)  
ス(ル)と(り)る(人)の(記)小(見)え(り)是(を)天(下)第(一)の(大)城(と)

モ(莫)目(爾)國の(甘)巴(亞)城甚(廣)大(ある)を(り)て(天)竺(の)諛(禄)と  
號(せ)と(り)墨(曼)哥(城)を(周)圍(拂)郎(斯)國(道)法(め)く(三)十(里)  
と(コ)ウ(ラ)ニ(ツ)ト(ル)と(り)る(書)小(見)え(り)我(二十)六(里)餘(小)當  
り(是)城(往)古(ハ)墨(曼)哥(國王)の(都)城(あり)を(歐)羅(巴)洲  
の(伊)斯(巴)泥(亞)國(より)奪(ひ)と(り)て(今)ハ(國)名(をも)新(伊)斯(巴)  
泥(亞)と(り)其(外)ハ(支)那(國)北(京)城(中)城(下)を(共)め(り)周  
圍(都)逸(國)道(法)め(く)二(十)四(里)と(り)我(三)十(四)里(八)合(あり)  
人(數)六(百)萬(餘)あり(更)小(禁)軍(二十)一(萬)あり(い)へ(り)是  
等(こそ)江(戸)より(も)大(ある)もの(なる)べ(き)熱(爾)馬(泥)亞(國)  
王(都)ウ(子)子(ニ)城(中)城(下)小(通)と(り)人(數)六(十)萬(と)り(然)と

ハ北京の十分は一なり魯細亞國都莫斯科城周圍七里  
何國の道法と見せられ  
和蘭國の道法なり  
といへり我九里なりなりなり(ストロイス)とい  
る人此記ふを八九辰路といへり九辰ハ我六里弱なり又  
王室所屬の外城中城下は九萬五千戸あり往時ハ今の  
一倍をよりなりしとど一時(カサニ)および(キリシ)の韃人謀反  
して大亂入せしより以來ハ大さ右のぶととより  
但(ストロイス)が彼地は在る寛文の頃ハ事あり五里ハ  
當る説は其後の言なり寛文の後漸々魯細亞國大ニ興  
起しり今ハ初のぶとと大かたりくも知べ  
らハ伯尔奔亞國王都(イスハン)拂郎斯國の道法ハ周

圍十二里といへり(ストロイス)ハ五辰路といへり拂郎斯の十二  
里ハ我十里四合より十六辰路ハ當り都尔格國王  
都公斯璫丁百兒城周圍意太里亞國の道法少く十五里  
園圍と本城とを除けを十二里といへり其十二里ハ我  
四里三合なりなり是等の外歐邏巴の大城ハ意太里  
亞國都羅媽拂郎斯國王都把理斯語厄里亞國王都(ロシテ  
ン)此三城ハ一なり然るも羅媽城周圍意太里亞國  
の道法少く十三四里といへり我四里七合餘よりハ五里一  
合弱ハ當り把理斯も(ロシテン)も大さ大概羅媽城の類  
なり右里数ハいづれも(コウランツルク)(ヒュス子ル)と  
よ入替せり小兒なり

(ウエー子)以下の諸城は中最大なるは伯尔奔亞國のイ  
スハニなり然れども其周圍我十里四合むり小當るとは  
これを圓形の美ゆゑ全徑二里三合むりなり江戸  
の全徑ハ四里といへば右の數城いづれも江戸の  
大小小及ざるこゝを知らざれば是をめて見まば右の外も  
アフリカの馬邏可城弗沙城など大城ありしも非  
ども江戸より大なるものハ得難き事必定なり然るに  
我國の京都江戸を以て天下最大城の列小ありしむ  
こゝ元よりの當の論なり但し右小し我國の道法ハ  
六尺五寸を一間と一六十間を一町と一三十六町を一

里とすゆれを以て

日本人は一箇の氣象ありこゝを名けて膽氣なりとやいふ  
英氣ありとやいふ雙敵の爲小打敗られ打負はる時こそ  
怨を得報ゆるこゝ能ざる時小しこゝ精神泰然として  
みゆゑ強手を加ふることを難しとて其生命を輕賤する  
こゝ斯の如し

校者の言小曰作者の羅旬語をりて此論を記するを案  
すふ強手を自己に腹小加ふと見えしは其人通  
例むのこゝが腹を切自殺するこゝ強しと  
なすて全部せしめる人を  
予ら辞めく校者とハり

其内亂の跡そのうちらんの跡あとはわのりくま実小駛まことくちやんづき事ことども充満ちゆうまんせりまされを  
 昔時あゆよりその人おん各々おん勇氣ゆうき第一だいいち〜むころろ孤こ希しひひ〜ことこと明あ  
 白しろゆり其史記そのしきの載のりる所ところふふより〜義經よしのぶ清盛よしみね捕阿倍仲麻呂あへなかつまろ野馬のま臺たい自じ  
 殺ころのの後あとををあどあど〜人ひと及びおよび其餘そのま名譽めいよの人ひとは大武功おほぶつこうあり〜話わを聞き  
 んんのれのれを何なにもも日本人にほんじんの自讃じざんも〜ことかの古ふるは羅媽人らまじんが  
 (ミウツキイスラホエ)及びおよび(ホラツキイコクリテス)二人ふにんハ時ときのの小せう於おるるが如ごとくあり  
 事ことを信知しんちをべしべし  
右時動うごて羅媽らまの人ひと改選かえん巴はの内うち外そとを兼係かねがへする身みを羅媽らま  
の代とよ其その閑閑かんかんの武功ぶつこうの事ことを今いま至いたるるまで傳つたへて物ものとと  
 従来じゆんらい我談説がだんせつせし所ところの當下とんげは一證いつしやうとす〜不足ふそくべきハかの薩摩さつま  
 州しゅうの産うある七人しちにんの君士きんしが異國いこくより出別しゅつべつ〜和蘭人わらんじんの前まへふ於お  
 て希有けうゆうの働はたらきをた〜ゆ〜ぞらりりる其事そのこと尤なほふりあがごとし

千六百三十年寛永七年の〜となりりる其比そのひまでハ日本よめいもいま〜四  
 方の通路つうろ開ひらけ〜國人こくにんのつぎまの地ちへも隨意ずいふ行ゆて通商つうしやう〜る  
 をりな〜一箇いつくわんの日本にほんは商船しやうせん交易かうぎの爲ためは臺灣たいわんふ行ゆり  
 後のちふ〜臺灣たいわんの地ち支那人しやなじんふ取とり〜今いま至いたるるまで支那しやなの所領しようれい  
 なる其比そのひまでハ猶なほ和蘭人わらんじんの地ちあり〜當時たうじハ和蘭産わらんさんある(ヒール  
 モイツ)人ひと臺灣たいわんの刺史し〜ハ遺恨いこんありての事ことはやありりる  
 かの小船せうせんあり〜渡わたり来きり〜日本人にほんじんを痛いたく厲げ〜ぞ取扱とらひひける  
 日本人にほんじん謂いはくおのが身みハさ〜もいふハ足あびと〜い〜是これハ我君わがきみ  
 の耻辱ちぢうふ〜あれ〜國くにふ歸かへり〜其主君そのしゅきみふ對たい〜て大おほく歎なげき  
 訴うへ〜り斯しかる忌々きき〜ハ恥辱ちぢうを(ナンバニイ)  
 換か夫ふ尔る自注じゆしゆ曰い南方なんぽうの民たみを〜り  
 賤せん稱せうあり凡おほ異國いこく人ひとをバ皆みなさ

之り別て和蘭人を之り譯者曰(ナンバニ)ハ南蛮人あり我國の所謂南蛮人ハ  
伊斯波泥亞人波爾杜瓦人をして和蘭人を紅毛人と云ふ紅毛人と云ふ  
不受て之を報ゆべきやうもなかりけるわがふかの主君大不  
憤怒し之を處小其衛士多し曰我君よ我我等小君の讐を報  
ゆるを許し之をばハ我等永く君の侍衛し之を能はじ  
我等願くハ無道者の血をめて此汚穢を洗滌せん彼凶賊が  
首を取来らん又々生あがら君が前小引来らば君随意不適  
當の罰を加へ多我等が中よて七人あはば足ぬべし海路の  
危嶮ある城郭の堅固なる侍衛の衆多ある彼が為小防禦を  
なすとも争で我憤排の銳利ある小堪ん彼等ハ南蛮人  
我等ハ(ニホンジン)檢夫尔自注曰日本人といふは又  
世界の人のいふ譯者曰檢夫尔何をりて之を天下の

うども韃靼より日を追て新軍を贈て備へく勢を助けけるほど  
小終小五十年の久し小堪て猶も日本の地小居て動がかりを  
然る小七百九十五年延暦十八年國の守護神ハ威力冥助や日本軍兵  
の銳き多勢力と一存小起張して終小彼等を抜き滅しけり  
如何となく日本の史に記し之曰(クワン)檢夫尔自注曰(クワン)  
大神の一や多手の像暴風雨の夜小當て其許多の手檢夫尔自注  
曰其其通力  
を救ゆる日本小大将田村麻呂進て攻ふ至て敵軍えより  
周章し力を落し居る折かれ折かれバ前幸事の堅むべきなく  
後小は引退く引退くば頼もぬく田村麻呂全き捷を得るなりと

一人も生て國小敵ハなく斯る大敗軍は不幸ある音信を其  
人小傳へて告べた者どもならず甲斐第二回ハ後宇多院日本  
小帝より時千二百八十一年弘安四年再び斯のごりくならずこや  
けりき韃靼の君世祖此時既又支那を取又其大将(モロコ)蒙古  
の事記有ハ唯十萬と云り放將軍が事ありんが議を用めて日本を滅し其既不得し其處の  
大邦小兼併せんと欲も是より即かの大將小大船四十  
艘軍士二十四萬を授け遣りしと云ふ換夫尔自注曰支那の然る小  
日本の浦に來にこれハ風暴の厲し其小あひく此強大無敵の  
軍船及び船中なりし軍士多く打碎りて失ぬ是より前小日  
本警の為小曾てより強く攻らざるこやハあはれ又是より後

雖も日本人の戦ひ勝て歡喜まへき事此強大ある二寇の  
敗績をふあくむらむ事ハけりべし凡日本人の其大概を  
いへば戰場に在り謹審勇敢謀畧奮る處なく軍法に在り次序  
亂る事なく將帥の命を聽かむて悦び進んで其宜きを失ふ  
ことこれ一是等の事我既不信受人も知し先むと欲する處  
あり後世不至らば自然天下は明白ありべし其力のたりさ  
ま日本を畏る重むるべし國家太平を受る  
の久し静謐を得るの甚し其今の時如くならずも他の諸國  
の多し是よりして頓悟怠慢懈弛遲重の弊を生じて漸りて  
轉して怯懦な風俗となすの恐ある類ハはるべし其

故ハ其人常ニ高名ナリ古人之大功義勲の事を服膺して戦場  
ニ勇むの烈シク志及び名誉を好むの懇ある心を養育する  
こと甚親切なり其子を育すこと剛と勇と法りて第一の  
重き教訓として力を竭して幼心小銘刺するを力て意とせ  
てと見えたりさきバ孩提の児號泣する時ハ父母毎ニ軍曲  
義経あり謡を歌ひて是を靖む在学の童兒讀書を学ぶも殆  
他の書を雜へて勝つる勇士まじハ其豪傑なりとて英雄を  
てとする處の自殺を事とし輩の遺言の類及び其事跡  
の少くは是漸を以て童子幼稚の時よりして剛心勇氣及び  
義経の心けりてとんと要ぶるれたるを長者集會する時を

多くハ古人武功の事を談ずるをりて第一とて史冊の記する  
所を語りて委曲の微あるに及び然して又とづくと是が為小  
感慨とて堪む豈唯然るのみならず今聞名譽の嗜好小醉  
ふこと酒をりてするよりも甚し是小よりて國の格式小て山  
の頂小火を燃せしやあり是ハ國家を驚かむは危急及ぶ  
或ハ帝より諸侯小命して即時小部下の士卒を致すの時を  
では曾てなれ事あり斯の如き火を足すバ諸人群衆して記  
録せしむる事を欲し各々武器を携へてわのが陣所を知ん  
と欲するの急あり不堪に彼此互小追過て聽命の第一とて  
事を欲さむけりて成名を好むの急あり戦闘小勇む

の烈しきみづぐり好く危殆最大の地小當らんを欲て  
寧ろ急烈の心より時或ハ其身の不利と知りて大ハ  
讚美せしむるを致さず願ひ其命を受ん事を望め  
且日本人ま兵器の宜しき小走し遠く戦ふハ弓  
あり鳥銃あり手と手と相交り戦ふ小銃と刀と法用あつ  
別てその刀は鋭利あるや一刀少く人體を兩断となす  
よ堪し上作上鍛なるを以て是を異邦人小賣まハ其國  
外小贈りて法禁すこと既久し賣者ハ磔刑とり是ハ  
與り諸人ハ死刑とり  
在ハ我國の武備をいへり檢夫尔以来既よ百年餘小たり

如きは我國の風俗を其頃と今と同異如何あらん室鳩  
巢の駿臺雜話小是等の評あり



